

はそんなニュアンスだろうか。口語をうまくかつた上句が持ち味。

小春日の光は胸に届かずに抜きにゆく歯の歯磨きをする

山川さち子

窓から入る光線のぐあいで、頭や顔までは照らされているのか、腹から下の部分に光が当たっているのだろう。抜歯をするというので朝から神経質になり、ふだんは気づかない光線のぐあいまで気になつて、そのあたりを読みとればいいのだろう。

父からの手紙はないが父に出す手紙はあつて もう

田中和美

今月の作は、みな父上への挽歌。他の作から推して、

届かない

離れ住んでいる父が死去されたようだ。「父からの手紙はないが」は、父上が長く病んでおられたからなのだろう、と読む。心情・感情表現を押さえて、また形容詞、副詞を一切使わずに、独特の一首に仕上げている。

しんしんと墨絵の中の風景のごとくに夕べゆきふり
いづる

梶尾利徳

冒頭の副詞「しんしんと」は、結句「ふりいづる」の「ふる」にかかる。遠いイレギュラーなかかり方だが、あ

いだに動きや飛躍がないために、それほど違和感なくおさまっている。かえつてそこが表現上の特色になつているようだ。父母も兄もその死はどこか遠くして病む妻の生の何と死に近き

石島崇男

難病の妻の入院をうたう夫の歌の一首。すでに亡くなられた父母と兄の三人よりも、生きている妻の方が死を切実に感じさせると。わざと表現を屈折させることによつて、思いの深さを伝えている。

届きたる見返補強張替の『歌の葉』より菊の葉の落

つ 経塚朋子

見返しが補強され張り替えられている、誰かが長く大切にくり返し読んだ一冊。「日本の古本屋」等ネットで申し込んだ古本が、郵送されてきた場面。『歌の葉』は佐佐木信綱著の作歌参考書。何百回、何千回と参照され表紙が傷んだのである。明治二十五年初版、その後、かなり版を重ねたらしい。

不審者は不審者といふ札さげる逮捕をされる訓練のため 古川典子

現実の中の滑稽。虚構の中の厳肅。実際の場面では、何十人の人たちが、真面目に訓練をしているのだろうが、こう表現されるとなんとも滑稽である。「不審者」と大きな字が書かれた札を首に掛けられた本人の当惑顔が思い浮かぶ。

我らこの地球に生きて暮しをり隕石の欠片時に拾ひつつ 桑野智章

「隕石」の「隕」は落ちるという意味。人間は落ちてきた石を拾うことで、その土地が星の一部であることを認知する。小さな石の向こうに宇宙の大きさを想像する楽しみ。想像力を刺激してくれる作。